

完全主義と抑うつ傾向の関係についての研究

——Burns による完全主義尺度を用いて——

桜井茂男・大谷佳子

(奈良教育大学心理学教室)

(平成6年4月26日受理)

われわれは誰でも、「やるべきことはきちんと（完璧に）やりたい」という欲求を持っている。しかし、なかにはこのような欲求があまりにも強すぎて、些細なミスでも失敗と思い抑うつになる人もいる。一般に、完璧にやろうという欲求が強すぎることを「完全主義（perfectionism）」という。完全主義者は、やるべきことは何でも完璧にやらなければ気がすまない。少しのミスでも失敗ととらえるため失敗感が強く、「自分は駄目な人間だ」と思い込みやすい。そして、ひどいときには無気力や神経症、最近ではアルコール依存症や思春期やせ症にもなるといわれている（Pacht, 1984）。

これまでは、このような完全主義についてあまり研究は行われてこなかった。それは、概念規定があいまいであったこと、適切な測定尺度がなかったこと、によるものと思われる。Burns, D.D. は完全主義を積極的に研究しようとした先駆的な心理学者である。彼は完全主義者は行動や容姿など自分に関することについて、極端に高い基準を設け、それを常にクリアしようと努力する。さらに、その基準を少しでも達成できなければ失敗とみなすので、自己評価を低めてしまいがちになるとまとめている（Burns, 1980）。こういった見方を中心に、彼は10項目からなる自己評価式完全主義尺度を開発した。この尺度はアメリカを中心によく用いられている。本研究の第一の目的は、この尺度の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討することである。わが国では辻（1992）によって Burns 尺度を基礎にした独自の尺度構成が行われているが、日本語版ではない。国際比較研究も考慮に入れると、Burns 尺度の日本語版も有用ではないかと考えられる。

尺度の妥当性は、まず Hewitt and Flett（1991）に基づいて、高い基準を設定する傾向、自己批判傾向、自己愛傾向との相関で検討する。完全主義者は高い基準を設定し、その基準にきちんと到達できないと失敗と考えるため自己批判傾向が高く、また自分は完璧ですばらしい人間であると惚れ込む傾向があるとされる。したがって、高い基準を設定する傾向、自己批判傾向、自己愛傾向とは正の相関関係が見いだされるものと予想される。さらに、本研究では独自にタイプ A 行動との相関も検討する。完全主義者は高い基準にむけて一生懸命努力する傾向があり、タイプ A 行動における精力的に仕事をするとといった側面はこの傾向と類似すると思われる。したがって、タイプ A 行動とは正の相関関係が得られるものと予想される。

近年、健康心理学ではストレスに関連した研究が活発である。その中で、抑うつ傾向を代表とするストレス反応を生じにくいパーソナリティ特性と生じやすいパーソナリティ特性も検討されている。前者の代表的なものには「たくましさ（頑健さ：hardiness）」（Kobasa, 1979）といったパーソナリティがある。そして、後者のひとつとして最近、完全主義が注目されてきている。そこで、完全主義と、ストレス反応の代表である抑うつ傾向あるいは絶望感（hopelessness）と

の関係を調べるのが第二の目的である。絶望感は抑うつ傾向の核になる部分であると考えられている。

いくつかの研究で完全主義と抑うつ傾向との正の相関関係が見いだされている（例えば、Frost ら、1990；Hewitt & Flett, 1991；辻, 1992）。Flett ら（1991）は、ストレッサー（ストレス反応を生み出すような嫌な出来事）が少ないときは、完全主義の高い人と低い人で抑うつ傾向に差はないが、ストレッサーが多くなると完全主義の高い人の方が低い人よりも一段と高い抑うつ傾向を呈することを報告している。したがって、ストレッサーが多くなると完全主義の悪い面が出てくるものと言える。本研究では、ストレッサー、完全主義、抑うつ傾向および絶望感、といった3種類の指標を用いてこのような関係を検討する。

研究1 完全主義尺度の作成

目的

大学生を対象に、Burns（1980）のよる完全主義尺度の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討する。信頼性は内的一貫性に関わる α 係数と安定性に関わる再検査信頼性係数により検討する。妥当性は前述のとおりタイプA行動、自分に高い基準を設定する傾向、自己批判傾向、自己愛傾向との相関関係で検討する。完全主義はいずれの指標とも正の相関関係が認められるであろう。

方法

被調査者 公立大学の大学生413名（男子153名、女子260名）。この内、再検査法による信頼性係数を算出するために、105名（男子36名、女子69名）には同じ完全主義尺度が再度実施された。また、98名（男子31名、女子67名）には妥当性の検討のために完全主義尺度の他に3種類の尺度も実施された。

質問紙 つぎの(1)～(4)の尺度が用いられた。(2)～(4)は妥当性の検討のために使用された。

(1)完全主義尺度：Burns（1980）の尺度をできるだけ忠実に日本語訳した。尺度は10項目で構成されており、「全くあてはまらない（1点）」から「非常にあてはまる（5点）」までの5段階評定であった。完全主義傾向が高いほど、高得点になる。なお、この尺度はFrost ら（1990）によれば、①高い達成基準を設定し、その達成にむけて努力する点と②小さな誤り（mistake）でも失敗とみなす点を強調して作成されている、という。可能な得点範囲は10点～50点である。なお、具体的な項目は表1に示されている。

(2)タイプA行動尺度：桜井・桜井（1989）によって作成された16項目の尺度である。4段階（1～4点）評定で、高得点ほどタイプA行動が多いことを示す。2つの下位尺度で構成されており、ひとつは「性急な行動」尺度であり、もうひとつは「精力的行動」尺度である。可能な得点範囲は下位尺度が8点～32点、尺度全体が16点～64点である。

(3)自己への態度（Attitudes Toward Self；ATS）尺度：Carver ら（1988）が作成した尺度で、3つの下位尺度の内で、高い基準を設定する傾向尺度（3項目）と自己批判傾向尺度（3項目）が用いられた。高い基準を設定する傾向尺度の項目は、①他の人と比べると、私は自分に多くのことを期待している、②自分の行動の基準は、たいていの人よりも高い、③私は、他の人よりも自分に高い目標を課している、であり、自己批判傾向尺度の項目は、①私は、努力しても思うよ

うな結果にならないと、自分自身に怒りを覚える、②私は、期待していたように物事が進まない、と、動揺してしまう、③私は、物事が思いどおりに運ばないと、みじめな気持ちになる、である。評定は(1)の完全主義尺度と同じ5段階評定である。各傾向が高いほど高得点になる。可能な得点範囲は3点～15点である。

(4)自己愛尺度：Raskin and Hall (1979)を参考に筆者のひとり(桜井)が作成した尺度であり、39項目からなる(付録1参照)。「あてはまる(1点)」か「あてはまらない(0点)」の2件法であり、自己愛傾向が高いほど高得点になる。可能な得点範囲は0点～39点である。信頼性および妥当性は確かめられている(別の機会に発表予定)。

手続き 413名の被調査者には上記(1)の完全主義尺度が集団形式で実施された。7週間後に413名のうちの105名に、同尺度が再実施された。これは再検査による信頼性を検討するためである。また、98名には上記(2)～(4)の尺度が完全主義尺度とともに実施された。尺度の信頼性を検討するためである。

結果と考察

10項目の完全主義尺度の項目平均、項目標準偏差および項目－全体相関係数が表1に示されている。項目平均は2.20～4.04、項目標準偏差は0.92～1.23の範囲にある。項目－全体相関係数は.33～.60であり、すべて1%水準で有意である。相関の程度のやや低い項目もあるが、原尺度との共通性を考慮し10項目すべてを最終的な完全主義尺度項目とした。表2に示されているように、10項目による尺度平均は32.14、標準偏差は5.18である。尺度のまん中が30点であるから、平均はほぼまん中にある。男子の平均(標準偏差)は31.81(5.42)、女子のそれは31.38(4.90)で、性差は認められなかった($t(411) = .83, ns$)。信頼性については、 α 係数は.60であり、許容できる範囲にある。7週間後の再検査による信頼性係数は.70($p < .01$)で、安定性が確認された。

つぎに、妥当性を検討するために用いた3種類の尺度との相関が算出された。結果は表2に示されている。完全主義とタイプA行動尺度との相関は、性急な行動で.25($p < .05$)、精力的行動で.21($p < .05$)、尺度全体で.27($p < .01$)と低いが有意な正の相関であった。また、自己への態度尺度では、高い達成基準と.46($p < .01$)、自己批判と.51($p < .01$)で、いずれも中程度の有意な相関であった。自己愛では、.19($p < .10$)と傾向水準の相関に留まった。これらの結果は、予測を支持するものであり、妥当性があることを示している。なお、各尺度の平均、

表1 完全主義尺度の項目平均、項目標準偏差、及び項目－全体相関係数 ($n = 413$)

No.	項 目	M	SD	I-T 相関
1	高い目標を持たなければ、私はきっと二流の人間で終わってしまう	3.48	1.17	.50
2	周りの人は、私が失敗するなどとは、おそらく考えないだろう	2.20	0.94	.33
3	物事はうまく成し遂げられなければ、それをした意味がない	2.44	1.18	.47
4	私は何か失敗すると、気が動転してしまう	3.55	1.16	.42
5	私は、何事でも一生懸命やれば、周りの人よりうまく成し遂げられると思う	3.30	1.06	.44
6	私は、弱点を見せたり、愚かなことをしたりすることは恥ずべきことだと思う	2.69	1.23	.52
7	同じ間違いを何度も繰り返すべきではない	4.04	0.92	.47
8	私は、人並みなことをするのでは決して満足できない	3.11	1.09	.56
9	重要なことで失敗するようでは、私はたいした人間ではないと思う	3.05	1.15	.60
10	物事が思うように成し遂げられない時に自分を叱責することは、将来のためによいことだと思う	3.68	0.97	.34

注) I-T 相関とは、各項目得点と全体得点との相関係数である。この値は全て1%水準で有意である。

表2 完全主義尺度と妥当性を検討するために用いた各尺度の平均、標準偏差、 α 係数及び相関係数 ($n=98$)

尺度	M	SD	α	妥当性を検討するための尺度					
				(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)
完全主義 (1)	32.14	5.18	.60	.25*	.21*	.27**	.46**	.51**	.19 ⁺
タイプA行動									
性急 (2)	18.72	5.39	.81	—	.45**	.88**	.01	.27**	.38**
精力 (3)	19.39	4.59	.73		—	.83**	.30**	.18 ⁺	.38**
全体 (4)	38.11	8.52	.83			—	.17 ⁺	.27**	.45**
自己への態度									
高い基準(5)	8.98	3.46	.69				—	.04	.38**
自己批判(6)	10.71	2.46	.61					—	-.07
自己愛 (7)	14.53	5.16	.77						—

注) ** $p < .01$, * $p < .05$, ⁺ $p < .10$

標準偏差、 α 係数も表2に示されている。 α 係数は.61～.81の範囲にあり内的一貫性が認められる。

以上の結果より、本研究で作成された Burns (1980) 尺度の日本語版は信頼性と妥当性を備えた有用な尺度であると結論できよう。

研究2 完全主義、ストレッサーと抑うつ傾向の関係

目的

完全主義と抑うつ傾向および絶望感との関係と、完全主義とストレッサーがどのように抑うつ傾向および絶望感と関係しているかを検討する。Burns (1980) や Hewitt and Flett (1991) に従えば、完全主義は抑うつ傾向あるいは絶望感と正の相関関係にあるものと予想される。また、Flett ら (1991) によれば、ストレッサーが高いとき完全主義傾向の強い人は低い人よりも抑うつや絶望感が高いと予想される。

方法

被調査者 公立大学の大学生163名 (男子52名、女子111名)。

質問紙 つぎの4種類の尺度が用いられた。

(1)完全主義尺度：研究1で作成されたもの。

(2)ストレッサー評価尺度：大学生96名 (男子19名、女子77名) に過去6か月間に起こった嫌な出来事を最大10個まで自由記述してもらい、それを基礎にして作成した48項目の尺度である。各項目に対してその出来事が起こった頻度と嫌悪性をたずね、両値を掛け合わせるによって項目得点を算出し、48項目の合計点をストレッサー評価得点とする。実際の尺度は付録2に示されている。頻度は「全然なかった (0点)」から「よくあった (3点)」、嫌悪性は「全然いやでなかった (0点)」から「非常にいやだった (3点)」で評定する。

(3)抑うつ傾向尺度：Zung (1965) による自己評価式抑うつ尺度の日本版 (福田・小林, 1973) を用いた。20項目で構成されており、4段階 (1～4点) 評定である。抑うつ傾向が高いほど高得点になる。

表3 完全主義、ストレッサー評価、抑うつ傾向及び絶望感各尺度の平均、標準偏差、 α 係数及び相関係数 ($n=163$)

尺度		<i>M</i>	<i>SD</i>	α	(2)	(3)	(4)
完全主義	(1)	32.24	4.97	.54	.18*	.03	.11
ストレッサー評価	(2)	92.74	55.66	.90	—	.47***	.18*
抑うつ傾向	(3)	41.90	7.64	.80		—	.55***
絶望感	(4)	40.88	8.50	.85			—

注) *** $p < .01$, ** $p < .05$, + $p < .10$

表4 完全主義尺度の各項目と抑うつ傾向及び絶望感との相関係数 ($n=163$)

完全主義尺度の項目 No.	抑うつ傾向	絶望感
1	-.03	-.04
2	-.15 ⁺	.01
3	.07	.26***
4	.26***	.07
5	-.23***	-.26***
6	.24***	.30***
7	-.00	.06
8	-.13	-.11
9	.09	.19*
10	-.05	-.06

注) *** $p < .01$, ** $p < .05$, + $p < .10$

(4)絶望感尺度：Beckら(1974)による絶望感尺度の日本語版(桜井・桜井, 1992)が用いられた。20項目で構成されており、4段階(1～4点)評定である。絶望感が高いほど高得点になる。

手続き (1)から(4)の尺度が集団形式で被調査者に実施された。

結果と考察

4つの尺度の平均、標準偏差、 α 係数および相関係数が表3に示されている。完全主義の α 係数が.54と研究1よりやや低いほかは、高い α 係数が示されており内的一貫性は確認された。相関係数をみると、完全主義と抑うつ傾向とは.03 (*ns*)、絶望感とは.11 (*ns*)であり、有意な正の相関関係は見られなかった。そこで、完全主義尺度の項目ごとに抑うつ傾向および絶望感との相関係数を求めてみると、表4のように抑うつ傾向では-.23～.26、絶望感では-.26～.30と負から正までの広い範囲に分布している。完全主義は抑うつ傾向および絶望感と正の相関関係が認められるという予測は支持されなかったが、その原因はFrostら(1990)が指摘した通り、完全主義尺度の中に複数の側面の存在することによると考えられる。予測に合致するのは項目3、6、9などであり、逆の結果が認められるのは項目2、5、8などである。前者は完全主義のネガティブな側面が強調された質問項目であり、後者は逆にポジティブな側面が強調された質問項目である。

つぎに、完全主義とストレッサー評価との相関係数が.18 ($p < .05$)と低いので、一応独立と見なして、両者を独立変数、抑うつ傾向あるいは絶望感を従属変数とする分散分析を行った。抑うつ傾向を従属変数にした場合には、ストレッサー評価の主効果 ($F(2, 114) = 2.20$, $p < .11$)

が10%水準に近かった他は、完全主義の主効果も交互作用も有意ではなかった。絶望感の場合も同様で、ストレッサー評価の主効果 ($F(2, 114) = 9.83, p < .01$) が有意な他は、完全主義の主効果も交互作用も有意ではなかった。したがって、完全主義の程度に関係なく、ストレッサーが高いと抑うつ傾向あるいは絶望感も高いことだけがわかった。予測は支持されなかった。

相関分析あるいは分散分析の結果は、Burns 尺度の日本語版で完全主義を測定する限り、完全主義の高低に伴う抑うつ傾向あるいは絶望感の差はないことを示している。ただし、測定尺度の中には雑多な側面が含まれている可能性があり、今後は完全主義を多面的に捉えて検討していくことが重要である。

結 論

研究1では、Burns (1980) による完全主義尺度の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。10項目の尺度にしては内的一貫性を推定する α 係数が .60 とやや低かった他は、信頼性も妥当性もほぼ確認された。研究2では、これを用いて、抑うつ傾向および絶望感との関係をストレッサー評価を交えて検討した。その結果、完全主義は抑うつ傾向とも絶望感とも有意な正の相関は見られなかった。同様に、完全主義とストレッサー評価を独立変数、抑うつ傾向あるいは絶望感を従属変数にした分散分析でも、完全主義の主効果も完全主義とストレッサー評価の交互作用も認められなかった。したがって、完全主義は抑うつ傾向や絶望感とは関係がなく、ストレッサーを増幅するような効果もないということである。ただし、研究2でも完全主義尺度の α 係数は .54 と低く、さらに項目ごとの抑うつ傾向あるいは絶望感との相関は負の相関から正の相関までみられたことから、本完全主義尺度には2つ以上の側面が含まれていると推定される。Frost ら (1990) や Hewitt and Flett (1991) が指摘するように、完全主義は多面的に捉えることが適切であると思われる。多面的に捉えられる完全主義尺度を作成して、さらに研究を続ける必要があろう。

引用文献

- Beck, A.T., Weissman, A., Lester, D., & Trexler, L. 1974 The measurement of pessimism: The hopelessness scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 861-865.
- Burns, D.D. 1980 The perfectionist's script for self-defeat. *Psychology Today*, November, 34-52.
- Carver, C.S., LaVoie, L., Kuhl, J., & Ganellen, R.J. 1988 Cognitive concomitants of depression: A further examination of the roles of generalization, high standards, and self-criticism. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **7**, 350-365.
- Flett, G.L., Hewitt, P.L., Blankstein, K.R., & Mosher, S.W. 1991 Dimensions of perfectionism, life events, and depression: Testing a diathesis-stress model. *Canadian Psychology*, **32**, 311.
- Frost, R.O., Marten, P.A., Lahart, C., & Rosenblate, R. 1990 The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research*, **14**, 449-468.
- 福田一彦・小林重雄 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679.
- Hewitt, P.L., & Flett, G.L. 1991 Perfectionism in the self and social contexts: Conceptualization, assessment, and association with psychopathology. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 456-470.
- Kobasa, S.C. 1979 Stressful life events, personality, and health: An inquiry into hardiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1-11.

- Pacht, A.R. 1984 Reflections on perfection. *American Psychologist*, **39**, 386-390.
- Raskin, R.N., & Hall, C.S. 1979 A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- 桜井茂男・桜井登世子 1989 タイプ A 行動における親子の関係—大学生を対象にして— 日本心理学会第 53 回大会発表論文集, 179.
- 桜井茂男・桜井登世子 1992 大学生における絶望感および抑うつ傾向と原因帰属様式の関係 奈良教育大学教育研究所紀要, **28**, 103-108.
- 辻平治郎 1992 完全主義の構造とその測定尺度の作成 甲南女子大学人間科学年報, **17**, 1-14.
- Zung, W.W.K. 1965 A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.

<付録1> 自己愛尺度

つぎの項目を読み、自分に当てはまるものには○、当てはまらないものには×を、項目番号につけてください。

1. ほしい物は手に入れないと気がすまない方である。
2. 私はどちらかと言えば、思い通りに生きている。
3. 人の幸せはねたましい。
4. まわりの人は私を大切にすべきである。
5. まわりの人から、ちやほやされたい。
6. 私は控え目な人間である。(R)
7. チャンスさえあれば、自分を売り込みたい。
8. まわりの人を私の思い通りに動かしたい。
9. みんなの前で、無視されることは耐えられない。
10. 私は尊敬されるべき人間である。
11. まわりの人よりも有能である。
12. お世辞を言われると、とまどってしまう。(R)
13. リーダーになりたい。
14. 私はまわりの人よりも支配欲が強い。
15. 私は世間並以上の生活でないと満足できない。
16. 注目されるとうれしい。
17. 私は個性的である。
18. 私はもっと自己主張できるようになりたい。(R)
19. 誰からも注目されたい。
20. ルックス（容貌、容姿）には自信がある。
21. 自分のことをあれこれと考える。
22. 私は魅力的な人間である。
23. 私には性的な魅力がある。
24. 人目につくようなことはしたくない。(R)
25. まわりの人が私のために、いろいろしてくれることを期待している。
26. 自分の顔を鏡でよく見る。
27. 鏡に自分のからだを写して見るのが好きである。
28. 私は偉大な人間になるであろう。
29. おしゃれである。
30. みんなの前でおもしろい話をするのは苦手である。(R)
31. 私は洒落を言って人を笑わせるのがうまい。
32. 生まれながらにして、自分には才能がある。
33. 自己主張する方である。
34. 美的感性は鋭い。
35. セクシーでありたい。
36. 自分に自信が持てなくなることが多い。(R)
37. ファッションには敏感である。
38. 自分と似たような容貌の人と友達になることが多い。
39. 人の幸せを見てみると、自分まで幸せな気持ちになる。(R)

注) (R) は逆転項目を示す。

<付録2> ストレッサー評価尺度

つぎに書かれた出来事について、以下のような2つの評価をお願いします。

①最近数ヶ月間に、それぞれの出来事をどのくらい経験しましたか。

()の中に、あてはまる数字を記入してください。

0…全然なかった	1…たまにあった
2…ときどきあった	3…よくあった

②それぞれの出来事はどのくらい嫌な経験でしたか。

< >の中に、あてはまる数字を記入してください。

0…全然いやでなかった	1…少しいやだった
2…かなりいやだった	3…非常にいやだった

なお、①の評定が0の場合、②の評定欄には何も記入しなくて結構です。

1. 病気やけがをした () < >
2. 友達と考え方が異なることがわかった () < >
3. 家の人に文句を言われた () < >
4. クラブやサークルでの人間関係がうまくいかなかった () < >
5. 家の人と喧嘩した () < >
6. 専門の勉強が進まなかった () < >
7. 授業がつまらなかった () < >
8. 大学生活が楽しくなかった () < >
9. 異性関係がうまくいかなかった () < >
10. 太った () < >
11. 試験勉強がつらかった () < >
12. 意欲がわかなかった () < >
13. 物事に集中できなかった () < >
14. 体調がよくなかった () < >
15. 大切なものを失った () < >
16. クラブやサークルがおもしろくなかった () < >
17. なかなか眠れなかった () < >
18. バイト先で失敗した () < >
19. 自分がいい加減であることがわかった () < >
20. バイトがきつかった () < >
21. クラブやサークルの試合に負けた () < >
22. 遊ぶ時間がなかった () < >
23. やりたいことがみつからなかった () < >
24. 勉強する気にならなかった () < >
25. 自分に自信がなくなった () < >
26. 学校へいくことがつらかった () < >
27. バイトで疲れた () < >

28. 学校に遅刻した () < >
29. 記憶力の衰えを感じた () < >
30. 朝なかなか起きられなかった () < >
31. クラブやサークルになじめなかった () < >
32. レポートの量が多かった () < >
33. 友人の悪口を言った () < >
34. 太ったと言われた () < >
35. 自分が優柔不断であることに気がついた () < >
36. 時間に追われた () < >
37. はっきりものが言えない自分について考えた () < >
38. バイトの給料が安かった () < >
39. 生活にはりがなかった () < >
40. 進路の選択について考えた () < >
41. 体力の衰えを感じた () < >
42. 人に頼ってしまう自分について考えた () < >
43. 専攻分野に興味がなくなった () < >
44. 学業上のこと(試験、単位の取得など)で失敗した () < >
45. 恋人がほしいのにできなかった () < >
46. 自分の性格について考えた () < >
47. 自分の能力について考えた () < >
48. 自分の容姿が気になった () < >

A Study of Relationship between Perfectionism and Depression : Using the Perfectionism Scale Constructed by Burns

Shigeo SAKURAI and Yoshiko OTANI

(Department of Psychology, Nara University of Education, Nara 630, Japan)

(Received April 26, 1994)

This study was conducted to construct a Japanese version of the perfectionism scale by Burns (1980) and to examine the relationship between perfectionism and depression in college students. In Study 1, the original 10 items were translated into Japanese and they were administered to 413 college students. Ninety-eight students of them also completed the Type A Behavior Scale, the Attitudes toward Self Scale, and the Narcissistic Personality Scale in order to examine the validity of the scale. It has high reliability and validity. In Study 2, 163 college students completed the same perfectionism scale with the Stressor Evaluation Scale, the Depression Scale, and the Hopelessness Scale. There was no relationship between perfectionism and depression or hopelessness. There was also no interaction between stressor and perfectionism. Lastly, developing a multidimensional perfectionism scale is discussed.